

ソ連漁業視察団に同行して

佐野 誠 三

9月中旬来道予定であつたソ連漁業調査団一行はビザその他の関係でのびていたが、11月17日モスクワを出発、19日に東京着、1日おいて11月21日午後1時40分千歳空港着の日航機で来道した。

一行は太平洋漁業および海洋研究所カムチャツカ支所のクローヒン博士を団長としカムチャツカ漁族保護局長コルネシユーク氏、および近海漁業探索隊長ジガロフ氏のほか沿海州国民経済会議所属日本語通訳のセルゲーエフ氏の4名でクローヒン団長およびコルネシユーク両氏は昨年日本測調査団がカムチャツカ視察中お世話になつた方々である。

特にクローヒン団長はペテロパウロスクの奥のダーリニエ湖の研究所で20年も湖の環境とベニサケの再生産研究を続けている斯界の権威である。

さて日航機の到着が30分遅れたため空港で休憩の暇もなく直ちに北海道最初の視察地千歳支場に向つた。

調査団一行の案内には東京から曾根水産庁研究第一課長のほか海洋一課の吉崎北洋班長および外務省の昇氏が同行された。

吉崎氏および昇氏は昨年日本側のカムチャツカ調査団員でクローヒン氏およびコルネシユーク氏とはすでに顔なじみである。

千歳支場では昼食をとりながら札幌から出迎えた荒井場長、石川支場長から北海道の増殖事業の概況と千歳支場の沿革

などについて説明があり、食後各孵化室を見学して支笏湖へ向つた。第一孵化室内に設定された立体孵化器は強く一行の注意を引き特にコルネチユーク氏は熱心に収容卵数、水量、孵化後の取扱などについて矢つぎ早に質問を発し刻明にノートしていた。

またクローヒン博士は湖沼学者らしく早く支笏湖へ行きたい様子で暗くなると湖が見えなくなるのを心配して盛んに昇氏を促していた。

支笏湖到着は4時近く、すでに夕闇がせまつていたがその雄大さに歓声をもらし姫鱒の生産状況あるいは増殖施策などについて可成専門的な質問を発し、特に姫鱒が移殖成功の好例であり現在日本各地の湖沼へ種卵を供給している状況に大きな関心を示していた。

支笏湖事業場の孵化室はすでに満杯となり、一部千歳支場へ運んで飼育中で、このように孵化施設をフルに活用している状況も日本の増殖事業の実体を良く認識して行つたことと思われる。

さて湖水の大きさ、深さ、周辺の火山群など話はいつつきるとも知れなかつたが、札幌の業界主催の歓迎パーティの時間もせまり快適な補装道路を一路札幌に向い、さらに午後9時の列車で次の視察地稚内に向けて出発した。

札幌からの同行は、道の製品課長幹氏、漁政課勝井氏、斎藤氏ほか1名と小生の5名で一行12名となつた。

22日朝稚内着。

旅館で少憩の後稚内市長浜森および宗谷支庁長古田氏などの案内で港湾施設、工場などを見学、市長主催の歓迎パーティーに出席、ふたたびガソリンカーで旭川に向つた。

市長主催パーティーは出席者50名を超える盛大さで、市長歓迎挨拶についてクローヒン氏の『外は雪が降つて寒いが皆様の暖い歓迎に心から感謝する』とこれに答え極めてなごやかな宴が開かれた。

午後1時過ぎから9時迄(約40分遅延)のガソリンカーの旅は体の大きい調査団一行には可成窮屈であつたこととされるが少しもその様子を外に出さず、種々道内の気候、風土、地勢などについて質問を發し、特にクローヒン博士は支笏湖が良く見えなかつたことが余程残念であつたと見え次の屈斜路湖、摩周湖などについて予備知識を得ようと心がけていたようであつた。

23日朝、旭川のニュー北海ホテルを發つた一行は美幌まで再び車中の人となりこの間の旅行は二等寝台車貸切りの形となり種々と話がはずみ、翌日視察する虹別事業場、根室支場、西別川14線捕獲場に対する質問があり、またコルネンユーク氏は孵化用水の引用、濾過の方法、用水量と孵化卵数の関係、さらに北海道周辺の漁獲と洄游量との関係などにおよび、河川湖上量の調査の方法、湖上量と人工孵化利用量との割合など極めて専門的な質問が続けられ私共の解答に満足の意を表し盛んに『スパシボ』を連発していた。

午後2時過ぎ美幌到着、釧路支庁で準備された自動車に分乗弟子屈に向ふこと

となつたが、途中美幌峠で車を降りて夕闇せまる展望を楽しみ、予定を一部変更して硫黄山の噴煙を見て湖畔の砂湯に立寄り屈斜路湖畔を経て川湯を通り弟子屈の摩周ホテルに落ちついた。

日本の温泉特に北海道の温泉に初めての一行は、男女の混浴には余程驚いた様子であつたが、温泉につかつて翌朝までゆつくりと旅の疲れをいやし、24日愈々待望の摩周湖および西別川の増殖状況の視察に向つた。

幸い摩周湖は霧もなく周囲の展望は極めて良く、第3展望台からは屈斜路湖も望まれて一行は極めて満足の様子であつた。

11時過ぎ、虹別事業場へ足を延し幸内支場長、辻事業場主任ほか職員一同の出迎を受け、ほとんど満杯の孵化室に感心しましたマラカイトグリーン、過マンガン酸加里液による卵子の消毒に熱心な質問を發し容易に去り難い様子で、特に噴出する孵化用水には驚いたようであつた。

設備と事業遂行の実体を目のあたりに見て日本の増殖事業が如何に実質的なものであるかを深く認識したことであろう。

根室支場では幸内支場長主催の昼食会があつて、またいろいろと質問があり、特に孵化成績、回帰の問題が中心となりここでもわれわれの解答に満足の意を表し極めてなごやかな歓談となつた。

この日はさらに14線捕獲場を視て根室に向ふことになつていたので、名残りを惜しみつつ西別に向けて出発、あいにくのミヅレまじりの雨で悪天候であつたが14線捕獲場のサケの湖上状況、採卵受精の諸施設を熱心に見学、二重止めによる

未成熟魚の催熱に大きな興味を示していた。

また捕獲場魚止下の親魚の群集を見て全部採揚げて採卵に供するか？、虹別の孵化室はすでに一杯になつていたが、今後採つた卵は何処に收容するか？、あるいはどうして上流の成熟魚の採れる処で捕獲しないのか？など、いろいろ質問があり幸内支場長の明解な説明に大ききうなずいていた。

すでに夕闇のせまる午後4時過ぎ、捕獲場を出発、6時過ぎ小雨降る根室市に到着した。

根室はハボマイ、アキユリなど周辺の漁場を控えソ連領海に近いソ連調査団に対する関心は極めて深く官民合同の大晩餐会が待つていて、日本の歌、ソ連の歌の交歓が行なわれ、特にセルゲーエフ氏の「有楽町で会いましょう」は大喝采を博した。

25日は早朝宿を出発、ノサツブ燈台から今はソ連領となつた水晶島を望み、花咲の漁港施設を見、また厚岸を経て夕刻釧路についた。

ここでは市長主催の歓迎会が行なわれここでもセルゲーエフ氏の独唱が人気を呼びアンコールに大弱りの体であつた。

26日には釧路魚市場、港内などの見学があつて午後1時過ぎの汽車で札幌に向い午後10時過ぎグランドホテルに入つた。

釧路港の視察を終り出発までの時間を利用して桜井水研支所長より阿寒湖、屈斜路湖の話聞き特に阿寒湖の水温の対流に関する専門的な意見が交換された。ここで海産紅鮭卵の移殖のことに話が及びボルネシユーク局長は北海道で希望す

るなら、どうなるか分らないが一応モスクワのソ連魚族保護総局に書類を提出して見てはどうかと好意を示し、総局よりカムチャツカの保護局に連絡があつて、多分北千島産の紅鮭卵を移殖することになるだろうということであつた。

27日札幌グランドホテルで一夜を過した一行は午前中北大構内を視察して一路余市に向い北海道区水産研究所に至り研究施設、標本室などを見学、昼食後またたび札幌に向つた。

研究所では各研究者から研究概要の説明を受けそれぞれ熱心にメモし、また盛んに質問を發し北海道の進歩した水産研究の現況を良く認識した様子であつた。

午後5時グランドホテルでの知事招待パーティーに出席、当日の宿舎定山溪グランドホテルに向つた。

小生はここで北水研の平野氏と交代し翌28日朝11時一行の函館行を送り同行を終つた。

同行中終始熱心な視察態度には敬服すると共に強行日程にもかかわらず、疲れの色も見せずなごやかな交歓の出来たことは曾根課長を始め同行の各位の深い心遣いは勿論であるが、調査団一行のなみなみならぬ努力も決して忘れることはできない。

時にわれわれに関係の深いサケの増殖事業の全般にわたり親魚の保護から降海稚魚の保護に至る熱心な専門的な質問はその認識を深めるため大きな役割を果し道東視察の最も大きな収穫であつたことと思われ各地で日本のサケ、マスの増殖事業の進歩とその実質的な活動を礼讃していた。

西別川のサケの湖上状況は特に大きな感銘を与え、孵化室の收容の實際をその目で見たことは強い印象としていつまでも残るであろう。(国・調査課長)